

アメリカ大陸、満喫ドライブ LewisとClarkの旅のトレース

カナダ、モンタナ、ノース・ダコタ、そして、サウス・ダコタ

始めに

今回は、3日の連休に、半日のフレキシブルと、一日のバケーションをつけ、4泊5日の、長ドライブを経験した。なんとしても、前は僅か30分しかいなかったカナダを経験してみたいとの思いで、一大決心をしたわけだ。その帰りには、モンタナに入り、LewisとClarkが辿って旅の軌跡を少しでも味わって来ようというわけである。ミズーリ川を遡り、太平洋を見座した探検隊の隊員たちがどんな風景を見ながら旅を続けていたのか、彼らが見たものを自分で実際みて来ようというわけである。そして、そこに住んでいたインディアンたちの思いが少しでも感じ取れることができれば、と大平原を馬ならず、車に変えて、走りまくってきた次第である。

旅の感想は、とにかく、アメリカはひろい。否、アメリカだけでなく、カナダもまけず劣らず、広い。否、広すぎる。そんな印象でした。

一日目

29号線をただひたすら北に向かう。

ネブラスカからカナダには、ただ、インターステートを真っ直ぐ北に走るだけ。ネブラスカとアイオアの州境をミズーリ川に沿って北上する。Sioux Cityは、LewisとClarkの冒険で、犠牲者となった軍曹フロイドのモニュメントが丘の上に建っている。このあたり、ミズーリ川がビッグSioux川と合流し、東から南の方向へ大きく流を変えるところで、探検隊はたいへん苦勞をしたところである。ここから、暫く行くと、今度は、サウス・ダコタに入る。が、州境が複雑で、気がついたときにはすでに、サウス・ダコタだった。

テピーという、インディアンの移動用テント小



インディアンの移動用テント Tipiのモデル。木の骨格にバッファローの毛皮をまく。

屋の Tipi のモデルがあるインフォメーションセンターでガイドを入手。このあたりは勿論、かつては Sioux 族が支配していた地域、Sioux 族と言えば、最後まで合衆国に併合されるのを抵抗していた部族だし、戦闘的な部族ということで、ここを通過するだけで、なんとなく緊張感が湧いてくる。



あれっ。この車、どちらを向いて橋っているの？

高速道路を走っていたら、こんな光景に出くわした。思わず写真を撮る。勿論、車が逆行しているわけでは問題ないが、こんな車のうしろを走っている人は、どんな感覚なのであうか。

この日は、連休前の日ということで、行楽客が多いのだろう。そのためか、スピード違反を取り締まるパトカーがやたらと目に付く。

サウス・ダコタの農村地帯を突き抜けるインターステーツ、とにかく両脇はトウモロコシの畑が

延々と続いている。少し退屈気味のドライブ、ふと目に入った看板は、「とうもろこしのために、ゆっくり走って!」というもの。なるほど、トウモロコシだって、車の騒音には、頭を痛めているということか。最近では、花にもシンフォニーを聞かせると綺麗な花が咲くというくらいだから、やっぱり、トウモロコシが立派に育つには、静かな環境が必要というわけか。これだけ広大な、肥沃な農耕地があるのだから、アメリカの農業の底力にはかなわないだろうとつくづく、痛感した次第。

半日の行程ということであり、今日は、できるだけカナダに近いところというわけで、特に寄り道もせず、今日の宿泊予定あるウォータータウンに到着。この町、田舎の町でたいしたことはないだろうと思っていたが、着いてみるとなかなかの町だ。どうも、農村地帯の穀物の集積をする交通の要衝地として栄えていたようだ。簡単なガイドブックには、アメリカ絵画の有名な現代画



Terry Redlin の作品から

家の1人である、Terry Redlin の生まれた町とのことで、町には、大きな博物館があるとのこと。1977年の開館以来、200万人が訪れているというからたいしたものだ。

このウォータータウンから40マイルくらい、南西に行ったところに、De Smet という小さな町がある。ここが、有名な「草原の小さな家」の舞台となったところとは、後で知った話。良く見れば地図には、Little Town on the Preirie としっかりでていた。残念。次の機会に訪れることでもあればと思う。

2日目

いよいよ、今日は、国境を越える日。しかし、その前に、ノース・ダコタを突っ切らなければならない。一口で州ひとつを通過するといっても、200マイルはあるから、そう簡単ではない。まあ、のんびりとゆこう。というわけで、定刻の7時をすこし過ぎたが、ウォータータウンの町を出発。一路北を目指す。



50 マイルほど走ったところに、Slisseton という小さな町がある。これが KVLV の世界一高いテレビ塔。2,063ft とのこと。確かに高い。先端はかすんで見えないくらい。

これまでは、あまり気にかけることはなかったのだが、地図に、このあたり、南と北の分水嶺とある。確かに、西と東の分水嶺はロッキーの4000メートルを越える山々が連なった立派な分水嶺であるが、さて、南と北の分水嶺となると、アメリカ大陸を東西にはしる山脈がこのあたりにあるわけではないから、とくに気づかなかったが、確かに、北に進めば、水は五大湖に流れ込むか、カナダ側の海に注いでいるのだろう。が、とにかく、このあたり、どこまでも平野が続いており、どちらが標高が高いかなど全く分からない状態。そんな大地だから、雨水だって、ある日は南に流れ、ある日は北に流れているのかもしれない。が、とにかく、サウス・ダコタとノース・ダコタの州の境あたりが分水嶺になっているということを知った。意外な発見である。そういえば、四街道の我が家のあたりも、利根川に流れる水と、東京湾に流れ込む花見川の分水嶺になっていた。標高はたかくなくても、分水嶺はしっかりとあるのだということで、飛んだところで故郷を思い出した次第。

ノース・ダコタに入り、Fargo の町と、Grand Forks という二つの大きな街を通りすぎるが、丁度この中間あたりのところに、世界一高いというテレビ塔があるというので、そこに足を伸ばす。

地図で見れば、ほんの10マイル程度であるが、これが、田舎道ともなると行けども

行けども行き着かないという感じ。とにかく、周りはまだ、種まきの始まっていないトウモロコシ畑一色。たまに、森影があり、人家があるようであるが、それも数件も集まれば、ちょっとした村になる感じ。世界一高いというので、遠くからでも見えそうだと思います。それが間違い。とにかく、このあたりと検討をつけて、走らせたのだが、それらしきものはちっとも見つからない。時たま、テレビ塔のようなものもあるが、世界一というには少し貧弱すぎる。そんな思いでただ、ひたすら畑道を走っていると、確かにあった。畑の中に、一本だけ。天に突き出した塔がある。高さが



ガソリンを入れるために立ち寄った小さな町に、こんな立派な議会堂が。 Hillsboro の町で。

2,063 フィートとあるので、600メートルの高さ、なんと東京タワーの2倍近くだ。空が青く澄み切っていたせいか、先端がまぶしくて見えないくらい。このなにも障害のない大地に、これだけの高さのもの。一体電波はどのくらい届くのであろうか。ちなみにこれだけの高さの塔の先端は、90 キロ先から見

えることになるが。

とにかく、私も、世界一という話題性があるものを見ないわけには行かないとの根性でこのタワーを見て、いとまず満足。すぐにインターズーツに戻り、いよいよカナダに向かう。

国境を越える。

前回のカナダ行きでは、ほんの30分という僅か観光ドライブしかなかったが、今回は、カナダの大地をドライブするということで、ここして国境越えに挑戦。インターズーツから入るということで、しっかりした検問所があり、検査も要領よくやってくれるものと期待。検問所では、持ち物の申告だけ。そのあと、事務所に入りイミグレーションの手続き。自分の入るころにはまだ人も少なく、といっても10人程度が待っていたが、いざ、自分の番の頃になると、なぜか観光やら、学生の旅行者、若者達のグループなどがわんさと押しかけてきた。それに、インターズーツだと、やたらトラックが多い。ということは、荷物の検査がしっかりあるということ。観光旅行だけなのですんなりとすむかと思いきや、申告の際に、ビールを持っているといったため、持ち物の検査をするという。1人で観光旅行をするのも、また、検査を受けるにはよい対象ということか。いつの間にかできた長い列で待たされる羽目になった。時間はかかるものと覚悟していたが、なんなく荷物の検査もなしに通過している観光客もあり、少々貧乏くじを引いた思い。係官が来て、車のチェックということになった。自分では、それほど厳しい検査があるとは予測しなか



厳しい検問を受け、何とかカナダ入り。
直ぐに、インフォメーションセンターがある。

ったので、ビールのほかに少々
飲み残しのティキーラは申告しな
かった。ところが、この検査官、
キチンとこれを見つけ、これは、
申告漏れではないかという。質問
されたときにしっかりと申告しな
いはいかんと、厳しいおたっし。
時間を取り、挙句の果てにこのお
叱り頂戴で、なかなか辛い国境越
えであった。それでも、明日の夜
中までにアメリカに戻るというこ
とを再確認され、無事、カナダにはい
る。ここからは、もうアメリカではな
いのだ。さあ、どんなカナダドライブが楽しめるか、お楽しみというところで、スピード
表示がマイルでないことに注意しながら、ハイウェイをひた走る。行き先は、まず、マニ
トバの州都、ウィニペグである。

ウィニペグの町、さすがに大きい

カナダは、マニトバ州というのが、ノースダコタと国境を接している。西にいくとサス
カチュワン州がノース・ダコタからモンタナまでとなっている。このマニトバ州は、マニ
トバ湖に由来した名前とのこと。ウィニペグという大きな湖があるが、マニトバ湖は偉大
なる創造の神 **Manitou** が、アメリカ先住民族である **Ojibway** 族の言葉で “**Manitou-bau**”
となり、この名前になったようである。湖には豊富が魚の資源があり、それに、バッファ
ローの皮、カワウソやビーバーの毛皮が産業の中心であったようだ。大小あわせると、十
万以上の湖があり、ここに、300 種を越す、小鳥たち、そして、カリブーや、鹿、狼、熊、
北極熊などが生息している。ここに、ヨーロッパ人が入ってきたのは、高々 2 世紀前のこ



町中にこんな建物が・・・
ウィニペグで



こちらが州の庁舎　なかなか立派なもの。

と。毛皮を求め、そして、やがて、農地の開墾で入植してきたようだ。そのマニトバの州都がウィニペグというわけ。さすがにウィニペグは近代化されていて、町の賑わいは凄い。ネブラスカや、アメリカの中西部などの町からすると、まるで町に人が溢れているという表現がぴったり。リンカーンでは、まず考えられないような交通状態。信号は、歩行者信号が優先していて、歩行者もそれを承知で人々、車と車の間隙を縫うようにして道路を横断している。

ウィニペグから、カナダのシーニックドライブに入る。とにかく州都だけあり、ウィニペグの郊外には、しばらくにぎやかな町が続いている。それでも、Portage la Prairie（草原の中の輸送路）という町あたりになると、だんだん農村の風景となる。カナダの穀倉地帯なのだろう。ここも、アメリカの穀物大地に負けず劣らず、大した農村風景が延々とつながっている。期待していた天気は、この頃になるとややどんよりと曇ってきた。



Fort la Reine にあった Pioneer Museum

予想では、今日は雨がふるということであったが何とか持ちこたえている。Neepawa, Minnedosa の町を過ぎ、こんどは、北に向かう。とにかく自分の足で歩く最北の地ということになるだろう。今日の目的地は Dauphin という町であるが、そこに行くには、ナショナルフォレストを突き抜けなければならない。カナダの風景の楽しみは、この森林風景であるが、あいにくこのころには小雨模様。それでも、森に入ると、もやが森の雰囲気より



Riding Mountain National Park のすばらしい森林道路
霧のなかで、ヘラジカのお出迎えに会う。

り幽玄にしてくれて、これもまた、いい印象だ。たまに後に車がついて来たり、行き交う車もあるが、殆どが1人旅。このすばらしい森のなかの街道を走っていると、なぜか、ここの国中が立科の森林地帯のような気がしてきた。白樺の林のなかをゆったりとカーブを切りながらドライブしている気分は、とても優雅な感じ。1人で味わうには惜しいような気分。と、ひっこり、道路の脇にヘラジカが顔を

表す。ガイドブックに幸運であればひょっとしてなど書いてあったが、まさか、ここでそのヘラジカのお出迎えに出会うとは。

3日目

Dauphin の町は、近くに湖があります。1793年にフランス人がこの湖を発見し、時の国王の一番上の王子の名前にちなんでつけたのだそうです。その後、毛皮の取引の中心地として栄え、たくさんのヨーロッパ人がここに入植をしたそうです。1800年代に入り、スコットランドやイギリスだけでなく、アイルランドや、中部ヨーロッパ、さらには、ウクライナあたりからも人々が移住してきたといえますから、その当時から、世界中が毛皮を求めて大変な局地までヨーロッパ人が来ていたに驚かされます。



カナダでみた、穀物倉庫

ウィニペグがほぼ北緯50度くらいです。この Dauphin はそのウィニペグからさらに北西に300キロほど行ったところにあります。北緯51度近くあるのではないのでしょうか。ここから来たは、そろそろエスキモーの棲んでいるところということで、ここまで自分の足で来たことに感激。この Dauphin の町から、今度は、西にまっすぐ、Yorkton というところに向かう。このあたり、カナダの穀倉地帯で、とにかく、いろいろな穀物がとれる



ということ、立ち寄った博物館の中に様々なものが展示されていました。その穀物を作る農家にあるのが、写真のような建物。こんな建物が広い大地の中に突如として出現する。まるで、要塞のような感じ。よく見るとどうも穀物を貯蔵する倉庫のようだ。なんでこんな形になっているかはわからないが、これもこの土地にあった、そして歴史のある建物だと思う。

カナダの穀物地帯 Dauphin から Yorkton にかけて

YORKTON の町も交通の要衝地として栄えた町なのであろう。町には、なかなか趣のある建物が建っていた。ここはすでにサスカチュワン州入っていて、中央である大都市サスカトーンに向かう幹線が走っている。

このあたり、とにかく昔は富を求めた毛皮商人の往来ににぎわっていた町なのであろう。車を走らせていて、ふと脇の草村に目をやると、なんと、雪が残っているではないか。いくら北国とは言え、すでに5月。まさか雪を見ろとは思わなかったが、やはり、緯度が50度を超えたところ。北国の自然は厳しい。



Regina でみた、立派な議事堂。前では、マガモがよちよち散歩をしていた。

Regina の町が忽然と現れる。何の気なしに走り抜けようと町中を走っていたら、ここにも立派な議事堂が姿を表した。大きな町のものも、田舎の小さな町のことを、まあ、よくもこれだけ同じような形をした議事堂をつくるなどと思うほど、ここもまた、あの見慣れた形の頭をした建物であった。

ムース・ジョーの町

Regina の近くにある町である。その名前からしてなにか曰くのありそうな気がする。そんな期待から、カナダ農村地帯を只ひたすら西に向かって進む。昔は、毛皮の取引で栄えた町のようなものである。この町に入る前にビジターセンターがあった。何処の町にも、よそから来る人には、町の入り口にあるこうした情報を提供してくれる立派な案内所があるから、ここで、さまざまな知識を得ることができる。英文の案内書を簡単に読むことはできないが、帰ってから尋ねた町を思い出しながら、その町についていろいろと勉強できるのは楽しいことだ。よそから来る人には、こうして町中が歓待しているというイメージが湧いてきて、すぐに親しみを持てる。この町に入っただけで、Prince of Wales のとおりがあるのでびっくりした。ルイス&クラークでは、アメリカの北西部に、アメリカ大陸を横断できる幻の交通路があり、これを見つけることが Jefferson 大統領からうけた秘密の指令でもあったのだ。そして、その辺りには、白人のインディアンがいるという伝説もあった。太平洋からの帰還の旅の途中、ルイスはクラークとわかれ、数人で、アメリカの北の地方、

REJINA は州都の町

広大なカナダの穀倉地帯に度肝を抜かれ、スケールの大きいのは、アメリカだけではないことを思い知らされた。それに、カナダはアメリカと比べるとさらに人口が少ない感じ。隣の農家がいったいこの大地のどこにあるのかと思うほど、あたりを見回しても畑しか見えない。そんな印象だった。そんな穀倉地帯のなかに、州都 Regina の町が忽然と現れる。何の気なしに走り抜けようと町中を走っていたら、ここにも立派な議事

Bitterroot 辺りを探検した。そこで、喉から声を出す不思議なインディアンに出会い、それが、ウェールズ語の発音ではないかと、伝説のインディアンについての報告をしていたが、まことに、その伝説がカナダに残っていたのにはびっくり。このムース・ジョーの町を通過。町を出るとわずか数分で、また、あの広大な平原となる。ただ、ここでは、南に行くにしたがって標高が高くなる感じ。辺りの風景も農村の風景から次第に草原にと姿が変わり、やがて、高原という感じになる。目指すはモンタナとの国境。まだ、モンタナの山々が見えるわけではないが、まわりの景色を見ているといよいよアメリカに近づいたという気になる。

天気も次第に回復し、青空もちらほら。田舎道を只一台、車を走らせる。カナダに入るときには、インターステーツの幹線であったので、国境の検査もしっかりしていたが、今度は、まさしく田舎の中の一本道。やがて、U.S.Border の看板が見え、いよいよアメリカに戻ってきた。しかし、草原の中、あるのは、農家をすこしましにしたような建物がぼつんと建っているだけ。まさか、これが検問所。と半信半疑で近づいたら、確かに、そこが国境。車を止められと、なかから女性の係官がでてくる。パスポートと免許書を確認。そして、やはり、荷物の検査。ただ、ここは、田舎の国境。お客(?)は、小生一人。係官も暇と見え、何かと質問してくる。何処に住んでいるのか、仕事はなにか、そして、日本の何処に住んでいるのかとか。そのうち、日本語で、「ありがとう」などと言う。「おっ。日本が上手ですね。」という、日本人の友達がいるという。体格もなかなか立派なお嬢さん、柔道を習っていたようで、「一本」とか、「それまで」とか、知っている日本語を次々にならべる。どうも、こんなところまで来る日本人は、とても珍しいらしいようで、うれしくてたまらないといったようす。そんなわけで、気難しいことは何もなかったが、まだ寒いモンタナの草原の、風の吹きさらしの国境で、貴重な体験をした。それにしても、この係官、多分、自分の家からは一時間以上もかかるのであろう。これからは夏だからまだまだが、これが、冬となるとあたり一面が氷の世界になるはず。雪ならまだしも。氷の上をどうやってこの仕事場に通勤するのだろうか。他人事ながら、任務とはいえちょっとやそつとのことではすまないような気がした。

無事アメリカに入ると、今度は、大草原のパノラマ。ここがモンタナかというほど、すばらしい世界の広がり。後で見た絵葉書にモン



これがモンタナの大平原

タナを **Big Sky Country** と書いていたが、まさしく、そのとおり。この大きな澄み切った空は、なににたとえればよいのかと脱帽するほど、とにかく大きい。国境での必要時間、とりわけ、アメリカに入るときの厳しい検査を予測して、この日の日程は、行程を少し短絡したため、宿泊予定の **Glasgow** という町に 5 時ごろ到着。しかも、ここは山岳地帯の時間帯となっていて、さらに一時間早くついたことになる。町に入ると、すぐに **Cottonwood(ポプラ) Suite** という看板が目に入る。しかし、目的の宿は、**Cottonwood Inn** のはず。インターネットでしっかりと地図を調べてあったので、ここではないと思い込み、地図の場所を懸命に探す。何とか、この地図を便りにその場所に行けば、そこはなんと閑静な住宅街。とても宿屋があるような場所ではない。その近くの住民に、こういう旅館を探しているのだがと聞けば、先ほどの、田舎にしては、すこしハイカラな山小屋風のホテルに最近変わったとのこと。あてのホテルが見つからないときの苦労は前回のアーカンサスのドライブで嫌と言うほど味わったので、ここは、まずはほっと胸を撫で下ろしたところ。時間も少しはやかったので、9 まで開いているという博物館と、ダム湖をみることにした。先に日があるうちには、ダム湖へ向かう。目指すは、17 マイルほど先の **Fort Peck Lake**。



Fort Peck Lake をバックに。上流に 70 マイルくらいが湖

荒野の川を堰きとめてできたこの湖の立派なこと。こちらのダムは溪谷のダムと違い、とにかくスケールかどでかいという感じ。幅も大きい、せき止められた水は、100 マイルくらい上流まで達するというから、驚きである。そのために、沢山のインディアンの部落が、そして、文化がその水のしたに沈んだということであるが、ダムの恩恵を被る人たちと、それにより家を失った人では、ダムに対する印象が違うのは確か。そんな思

いで、湖を眺めると、すこし文明人の身勝手さを感じずるが。このあたりのミズーリ川の北の地域は、インディアンの居留地となっている。しかし、その荒野は、肥沃な土地とはいえない。結局、早い話が、インディアンは痩せた土地に移住させ、川の流域に広がる肥沃な盆地を白人の入植した人たちが開拓をしていったということのようだ。だから、この地の白人にとっては、**Lewis** や **Clark** は入植の先駆者であり、水先案内人として、非常に高く、尊敬されているのである。逆の立場のインディアンが、まったく違った評価をしているのは、容易に想像がつく。

ここの博物館が、ネブラスカにある、**Pioneers Museum** と同じような感じのもの。開拓依頼の白人の苦労の証拠を集めたようなところであるが、それでも、その歴史は、高々、

100年から200年の程度。だから、実に沢山の生活用品が展示されている。残念ながら、この日は、国民の祝日ということで、この日までが、5時で閉館とか。結局、中を詳しく見て回ることができなかった。まことに、残念であった。

あッ。ガソリンを入れ忘れた。

アメリカへの入国が無事済み、あとは、ホテルを探すだけ。と、ふと気がついたら、ガソリンが不足気味。というわけで、グラスゴーに着き、ホテルに落ち着いたら先ずガソリンスタンドに行くつもりでいた。カナダでのガソリンが高いと言うわけではないが、こちらの現金を持っていなかったのも、何でもカードで処理をしていたら、どうも、レートが0.9カナダドルアメリカドルなのに、そのまま1.0で計算されているようだ。そんなわけで我慢してきたので、できるだけ早くと心していたつもり。ところが、宿がなかなか見付からず、何とか見つけてほっとしたとたん、すっかりガソリンのことは忘れて、まだ、時間があるからとダム湖に出発してしまった。このダム湖までは17マイル。たいへんなことは、そこに小さな町があり、そのときに気がつけばよかったのだが、すばらしい景色に興奮し、ついつい、ここもパスしてしまう。さあ、帰りは、あと、17マイル。いくらタンクに余裕があると言っても、17マイルを走るのには厳しい。ガロン30マイルくらいの効率であるが、一割のマージンとしても、すでにランプがついてからかなり走っているのでぎりぎりというところ。そこで、少しコースを変更、10マイルくらいのところに幹線道路につながる交差点があり、ここまで行けば何とかなるだろうと、思い切りこちらに行くことを決断。どんな田舎でも、こちらは車社会だから、ちょっとした集落程度ならガソリンスタンドはあるはずと目論む。そして、ドキドキしながら、なんとか10マイルを走りきり、目的の場所につく。小さな町だが、穀物サイロがあるくらいだから、そこそこのガソリンスタンドくらいはすぐに見付かるだろうと思っていたら、案の定、ガソリンスタンドはあった。しかし、しかしだ。そのガソリンスタンド、なんと無人。しかも、これまで使ったようなことのない、仕組み。これには、参った。さて、どうしようものかとどぎまぎしていたら、それまで、ガソリンを入れていた人が、自分が終わったらここで入れればいいと、面倒を見てくれた。これには、助かった。この人が居なければ、まったくのお手上げ状態だったわけ。ぶじ、ガソリンをたんまりといれ、さあ、出かけようとしたら、ものすごい



シートは当社の製品でした。つい、親しくなって、一枚。

爆音を立てて、ATV(バギー車をこちらでは、このように呼んでいる。全地形対抗車とでもいうところか。)が二台ほどやってくる。こちらでは、馬の代わりにこうして、荒野を乗り回しているのである。なんと、これがまで、今、わが社で作っているシートを装着した、SUZUKI のもの。シートにも、見慣れたウェアニング・マークがついている。これには、うれしくなった。早速、その若者に、「このシートは、私の会社で作っているものだ。」と話かけたら、たちまち、親しくなり、記念に写真を一枚。ガソリンのおかげで、楽しい一幕を過ごせたわけ。こんな出会いが旅にはあるから愉快になる。

4 日目

グラスゴーから、東にミズーリ川が流れている。拳銃の取り合いから、ビッタールート
のインディアンを殺してしまい、その報復を恐れて、ルイスが逃げ逃げた場所がこの辺り
であろう。それにしても見渡す限りの平原で、それこそ馬で追いかけてまわすと水平線のか
なたまで逃げても、何処までも追いかけるという感じ。もちろん、森もなければ、小
高い丘もないから、身を隠すところなどない。まあ、それほど、モンタナは、だだっ広い
ところだ。

ノース・ダコタへ

モンタナが、山々の連なる高原かと思っていたが、この Glasgow あたりから、西も
東も大平原が広がっている。ミズーリ川は、バレーになっていて、この平原からは一段低
い所を流れている。そのためか、高速道路からミズーリ川を望むことはできないが、Lewis
や Clark がこのミズーリ川を遡っていったときには、きっとインディアンはこの丘の上か
ら、奇妙な白人たちの行動を監視していたに違いない。探検隊の西への旅は、順調に進ん
だが、帰るときには、Lewis は、コロンビア川の上流のスネーク川の支流である Blackfoot
川の分岐点で、Clark と別れた。現在のモンタナ、Missoula のあたりである。目的は、往
きに探検のできなかった、伝説上のアメリカ北西部の横断ルートの探検である。数人の部
下を連れて、本体を Clark に任せ、果てしない広大な土地を探検に行くのだから、その度
胸には度肝をぬかれる。何しろ、その土地は、未知の土地というだけではなく、戦闘好み
の Bitterroot 族の支配する地域だったからである。この向こう見ずとも、また、使命感と
もいえる若き Lewis の情熱には、この土地を実際に見てみると肌にしみじみと味わうこと
ができる。その Lewis は Bitterroot 族に見つかり、自ら、命を懸けて無防備で彼らに近づ
き、共にキャンプをすることになったが、インディアン達は次に日の朝、早く、馬と鉄砲
を盗んで、たち去ろうとしていた。これに気づいた探検隊たちとひと悶着があり、結局、2
人のインディアンが殺された。このたった 2 人が探検隊の犠牲となったインディアンだ。
2 人を殺し、自分達が誰であるかをインディアンに認識させるたるに Jefferson 大統領の友
好メダルと国旗をそのインディアンの死体の上に乗せ、それから、インディアンの復讐の
追撃から逃れるために、寝ずの逃走が始まる。あの見晴らしの良い高原であるから、また、

その場所になれたインディアンであれば、例え、半日程度の距離が有っても、普通では逃げ切れるものではないことがよく分かる。そんな状況のなかで Lewis は、逃げ逃げ、やっとの思いでミズーリ川に辿りつく。これが、偶然なのか、後から作られた物語が知らないが、その時、ミズーリ川を Blackfoot で別れた Clark の、その分隊が、グレートフォール



訪問者の住んでいるところにピンを刺す。ネブラスカからは、もちろん、日本からも初めての訪問者 Culbertson にて。

このミズーリ川を下っている。この怪我をしたのが、Clark と合流する前日ということであるから、場所は、おそらく、モンタナのこのあたり、グラスゴウかウルフポイントかと思われる。そんな思いで、二号線を東にひた走る。モンタナの東外れのまち、Culbertson は何の変哲もない町だが、ここの道路わきにビジターセンターがあったので、少し休みを取ることにした。客は、私と、たまたま、この日、テキサス大学を卒業し、故郷のミネソタに帰る途中という学生と 2 人だけ。ここにも、例により、おじいちゃん、おばあちゃんがつい二・三年くらいまえまで使っていたような日曜雑貨品がところ狭しと並んでいる。アメリカ人は、使わなくなったものを捨てるのではなく、こうして昔の人の苦労の歴史を大事に残して、それを伝統にしているのではと思う。実に良く、なんでも揃っているものと感心する。ここのセンター、壁にアメリカ大陸の地図と、世界地図が掲げてある。そして、訪問者は、自分の州の所にピンをさすようにしてある。そこで、小生もピンを譜たつほど取り、一つはネブラスカに、そして、もう一つは日本のところにつけた。が、なんと、ネブラスカも、そして、勿論、日本からの訪問者は、私が第一号であった。こんなところまでくる日本人は居ないということが。これも、Lewis と Clark の冒険へのこだわりがくれた勲章のような気がした。記念にモンタナのバッジをひとつ。

こうして、気分良くノース・ダコタに入る。モンタナとノース・ダコタの州境が、ミズーリ川とイエローストーン川の合流点で、ここで Lewis と Clark は再会をするのである。どちらの川もコロラドの雪解け水を存分に抱きながらとうとうと流れている。ノース・ダコタに入るとウィルストンと言う町がある。このあたりで急にミズーリ川の水が豊富にな

に隠しておいたカヌーで丁度下ってきたのである。これに飛び乗り、Lewis たちは助かったといわれている。Lewis と Clark の探検には、こうした、運命的な出来事がつぎから次へと出てくるので、まさに痛快なのである。こうしてモンタナの高原を逃げ回った Lewis たちは、ミズーリ川のゆったりとした流に乗り、Clark のまつ、イエローストーンとの合流点に向かったのだ。その途中で、Clark は、部下の間違って撃った弾丸が腿を貫通し、結局、重症の状態で、



Sakakawea 湖をバックに。さすが、広さが違う。

り、高速道路から川が見え隠れするが、実は、これは、この下流 200 マイルくらいのところに作られた **Garrison** ダムというのがあり、これによりできた、**Sacagawea** 湖がここまで広がっているのだ。そのおかげで、このあたりは道路から湖の姿が見え隠れする。広大な高原をアップダウンしながらはしっていると、突然湖が姿を現し、今度はノース・ダコタの大自然を楽しませてくれる。この頃になると天気も良くなり、とにかく空気が汚れて

ていないから、風景の色が原色に近い感じがするのだ。青い空を映した湖、芽生えたばかりの草原、そして、白い雲と、素晴らしいコントラストである。

この **Sacagawea** 湖を作っている、**Garrison** ダムは水力発電用のダムで、その規模は世界一とのことである。このダムの建設は、1947 年に始まり、\$294 百万ドルの経費で、1953 年に完成したとのことである。とにかく、アメリカのやることは度でかいと改めて感じ、このダムの上を走る。

Knife River Indian Villages

ここから少しミズーリ川を下ったところにあるインディアン部落の保存地帯。ミズーリ川の支流の **Knife** 川が、合流するあたりで、肥沃な土地に、**Mandans**、**Hidatsas** の部族がここに居留し、ヨーロッパ人との交流もしていたようだ。**Hidatsas** は、戦闘好きで、モンタナからワイオミングのほうまで、バッファローを追いかけて狩猟していて、その時に、**Shoshone** を襲い、**Sacagawea** を略奪してきたわけだ。その後、**Sacagawea** は、**Mandans** 族に買われ、そして、フランス系カナダ人の貿易商の妻になった。このあたり、**Sacagawea** が小さいころに生活した場所なのであろう。そんなわけで、**Sacagawea** のゆかりの地に、その業績に匹敵するくらい大きな湖、まことに相応しいような気がする。ここは、**National Historic Site** ということ、専門の学術員がいる。若い女性が施設を説明してくれることになっているが、時間がないので、自分で自由に見たいと申し出る。**Lewis** と **Clark** の探検の中にも何度も出てくるが、ここにインディアンの住んでいた、アースロジの模型がある。土でできた家であるが、これは、竪穴や、横穴の住居というのではなく、壁に土を塗ったという立派な木造の家というのが適当であらう。大きさは二階建てくらいの高さがあり、部屋も三つにも四つにも分かれていて、真ん中に囲炉裏のような、家族が集まるところがあれば、日本式に言うと、床の間もあり、座敷もあり、そして、台所も独立してい

て、その立派なこと。当初は、サウス・ダコタのバッドランドにある毛皮の取引所として使われていた、丘に半分穴を掘ったような家かと創造していたが、なんのなんの、これまでしっかりした家とは思わず、これには度肝を抜かれた。インディアンの歴史を知る鍵となるのが、バッファローロブという、バッファローの毛皮の裏に、年代順に、その年の大きなイベントの絵を画いたもの。これは、たいへん貴重な資料で、これにより、その部族の活動の歴史、活動の状況、生活の習慣などが分かるというもの。文字を持たないインディアンの伝統を伝えるものとして、大事に研究されているものであるが、やはり、彼らも部族の伝統を何らかの形で子孫に伝えてゆく必要性は感じていたのだと思う。

ここには、沢山の Lewis と Clark の探検の著書が陳列されていた。勿論、いま、私が訳しているものもあり、これにはとても親しみを感じた。



アースロッジ



その内部

ナイフ川の村とミズーリ川を挟んだところに、Lewis と Clark の Interpretive Center というのがある。学習資料館のようなものだ。こうした資料館がとにかく、ミズーリ川の流域には、何百とあるだろう。アメリカの歴史を知る上で、どれだけ、Lewis と Clark が果たした役割が大きいか思い知らされる。ここの資料館でも、東洋人は滅多に来ないのではないかと思うくらい歓迎された。Lewis と Clark にとっても興味を持っているという、 Lewis と Clark と Sacagawea と一緒にフラッシュをたかなければ、どんど



Lewis と Clark と Sacagawea と一緒に

ん写真を撮ってもいいと、逆に激励された。そんなわけで、ここでは、Lewis と Clark にまつわる貴重に絵画の写真をちゃっかり撮らせていただいた。

ビスマルクとマンダン

ビスマルクとマンダンは、ミズーリ川を缺んだ形になっている。アメリカには良く見られるツウィン都市だ。アメリカ大陸の内陸に行くと、フランス系の都市の名前でなく、ドイツ系の名前もよく目につく。勿論ビスマルクもその一つ。しかも、ノース・ダコタの州都になっているから、歴史は相当古い筈である。統計によれば、ヨーロッパ諸国からの移民で、もっとも多いのがドイツだと言うから、これは驚きである。しかも、イギリス系は、西海岸に集中しており、フランス、ミシシッピ川の南からと、カナダの北から入ってきたので、まんなかあたりは、ドイツ系が多いということか。ところで、このビスマルクの歴史を調べてみると、ここが、北アメリカ横断鉄道の拠点になったところで、この鉄道敷設にドイツの銀行が投資し、ここに、拠点を置いたとのこと。そのため、ここが栄え、ドイツの“鉄道大臣” Prince Otto Von Bismarck の名前にちなんで、ビスマルクという名前がついたようだ。もともとはダコタ族というインディアンの居留していた地域。ここにヨーロッパ人が入りこんで入植したというわけ。そんなことから、インディアンの町がマンダンなのである。その昔、このあたりには、マンダン族だけではなく、一般にダコタ族と言われる、Hidatsas、Arikara、そして、Yanktonai, Sisseton, Wahpeton, Hunkpapa それに、其の他の Dakota 族、Lakorah 族(よく知られているのは、Sioux 族である)が住んでいたらしい。Lewis と Clark はここで Sacagawea にあったのだが、1804 年当時、彼女のいた部落は、St. Louis よりも大きな街であったとのことである。

そのマンダンの町を通り過ぎたところで、パトカーが二台猛スピードで追い越していった。なんのことかと思いつながら走っていたら、これが、後で、わが身に降りかかる事故の前触れだったとは、知る由もなかった。

この日の宿は、さらに南に下がり、サウス・ダコタの Mobridge という町。Sioux 族が勢力を張っていたという、地域を走り、一路サウス・ダコタへ。

サウス・ダコタに入り、この日の宿泊地の Mobridge に到着。ミズーリ川のほとりにある町で、歴史のある街の雰囲気。ここにあるはずのモーテル「スーパー8」を探す。インターネットではあるはずになっていて、あらかじめここを予約しようとしたら、既に、部屋はないと言う表示がでている。何度やっても、また、いつの日にちをいれても空き部屋がないというので、その時おかしいと思ったが、電話での予約センターに連絡したら、何処に住んでいるのかとか、何処の宿とか言う。なかなか通じず、名前を言って、てっきり予約がとれているものと思っていた。ところが、現地で探してみると、どうしてもあるはずのところ例の看板が見当たらない。そこで、コンビニに入り、場所を確認しようとしたら、そのモーテルはいまは別のモーテルになっているという。なるほど、似たような形で、名前だけが違うモーテルがある。ここで、聞いてみると、確かに、以前はそのモーテルだっ

たという。そんなわけで、部屋があるかといったら、なんなく OK ということになった。こんなトラブルは覚悟の上とは言え、つくづく、英語の会話力がまだまだということで反省した次第。

5 日目

いよいよ、最終日。朝、いつもより早く目が覚め、すこし、ゆっくり走ろうと、ゆとりをもって出発。ここに来たのは、サカガキアのモニュメントを見るという目的があった。朝、6 時 30 分に出発。まだ、車の少ない田舎道で、案内板をみつけ、早速わき道に入る。モニュメントは、スッティングブルの銅像とともに、ミズーリ川の西側の小高い丘の上に



左、Sacagawea のモニュメント
右、Sitting Bull の銅像

立っている。スー市にある、軍曹フロイドのお墓のオベリスクほど大きくないが、ここにも立派なオベリスクが立っていた。遠く眼下にミズーリ川を見おろしながら、100 年かかるといわれて西部の開発が、わずか 20 年足らずでヨーロッパ系のアメリカ人により一気に進み、原住民のインディアンの生活様式、伝統、価値観までも一変させてしまったフロンティアの現実をどんな気持ちで眺めているであろうか。彼女の功績の大きさは、アメリカの 1 ドル貨幣のモデルになるほどであるから、現代のアメリカの基礎を築くのに貢献したその功績の偉大さは、まことに大きなものがあるといえよう。そんな気持ちで、大満足をして、さて、その帰り。ここから南にいかなくてはいけないのだが、道がまったく舗装されていない。それでも、アメリカは自動車社会。舗装はされていなくても自動車を通るにはまったく支障がないだろうとの推測で、この田舎道に挑戦することにした。確かに、道路は舗装していないが、逆に、下手な舗装道路のがたがた道よりもよく踏みならされているという感じで、結構、走り心地はよい。まわりは、まったくの牧草地。牛の牧場になっているのだろう。見渡す限り緑の草原が続いている。その中を一本道が突っ走っている。しばらくは、こん

な調子で、快適に飛ばしていたが、そのうち、段々周りに何も目印もない、まったくの平原の真っ只中に入る。道路の標識もない。方角も大体のことしかわからない。まっすぐ進んでいた道が曲がりくねり、自分の行きたい方角に車が進まなくなってきた。しまった、知らない道に入り込んでしまった。あたりの風景に見とれていい気になっていたのがまがい。この先に大きな川があるがそこを渡る橋が分からない。そんな不安を抱えて進んでいると、一件の農家があり、そこから出てきた人に道をきく。丁寧に、ここから橋を渡る道順を教えてくれた。そこまでは、よかったのだが、その先、言われたとおりに道に戻り、草原のなかを不安をいだきながら、頭の中に地図を描いてはしる。この道でよいという確信がない。そんな気持ちで走っていたのが悪かった。T字を言われたとおりに曲がったのだが、自信がないので、戻って確認しようとした。車を止め、Uターンをしようとバックにギアをいれた途端、ガーンというショック。「えっ。何で。」「しまった。」という気持ちが走り、一体何が起こったのか暫くは唾然という感じ。とにかく、こんな、車のいないところで、事故があるなんて、それが信じられない。しかし、そんなことをいつている場合ではない。車を降りたら、後ろにピックアップが追突している。こちらがバックをしたことまでははっきりしている。というわけで、こちらが悪いのは一目瞭然。相手の車は殆どダメージがないようであったが、こちらは後ろのバンパーとトランクがつぶれている。幸い、へこんだだけでランプがすこし割れている程度。そんなことで、これは、何とかしなくてはということになったが、あいにく、ここは、インディアンの保留地域。携帯は繋がらず、保険会社に連絡の仕様がなし。たいへんなことになってしまったと思って、相手のところにいったら、これが、なんと先ほど道を教えてくれて農家の娘さん。なんとまあ、親切をあだで返すようなものだが、まるで、偶然としか思われぬ。相手もそう思っている。というわけで、その娘さんが、保険会社に連絡し、パトカーを呼んでくれた。待つこと30分。

田舎の警察がやってきての事情聴取。こちらは片言の英語で、状況を説明。調書をとられ、とにかくバックをしたことが悪いということになった。しかし、その後、後ろの車も調書を取られていたので、前方不注意ということだろう。これで、結局、94ドルの罰金ということになった。とんだ、早起きのおつりであったが。

とにかく、1人旅。分からない道に入り込まないこと。これが、第一の教訓だ。

また、言葉に自信がないのだから

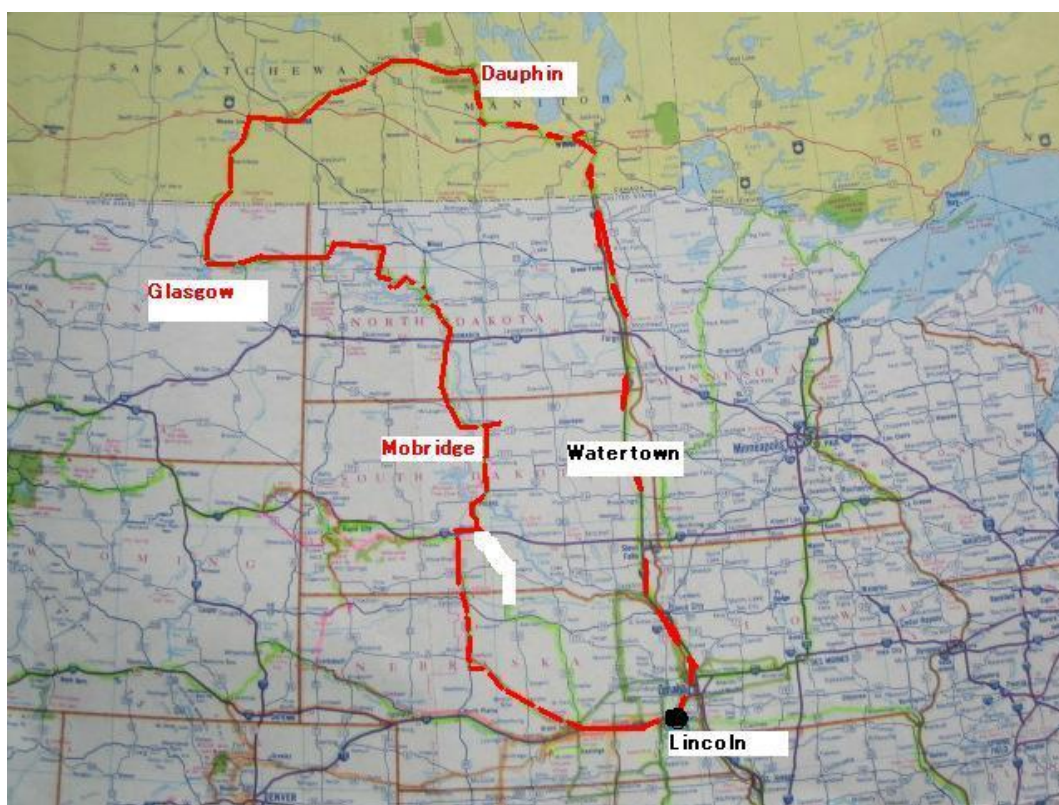


サウス・ダコタを走る

ら、冒険はやめる。第二の反省。

そして、運転には、最新の注意を。精神を集中して運転すること。第三の反省。
この程度で、済んだと思い、これを教訓にして、今後のドライブには十分注意をすること。
深く反省をした次第。

いうわけで、この日は、ドライブの最終日で余裕をもったスケジュールであったのだが、この事故の現場からネブラスカまで帰らなくてははいけない。まだ、400 マイル位残っているはず。事故処理のため、二時間ほどかかった。あとは、ドライブを楽しむどころか、懸命に走らなければ、明日の出勤に差し支える。走りに走りました。そのあとは、休みもとらず、パトカーにスピード違反だけは気をつけて、プレーリー、バレンタイン、ブローケンアロー、そして、グランドアイランドを經由して、リンカーンについたのが、8時過ぎ。12時間、トイレ休憩だけのぶっ通しの走り。どうやら、無事着きましたが、その後の事故の処理を残しての、少し気の重いドライブとなりました。



LewisとClarkの旅のトレース

行程

	予定	走行距離	宿泊
一日目	Lincoln 13:00 Omaha 14:00 Sioux 15:30 Watertown 18:30	352 miles	Watertown
二日目	Watertown 7:00 Fargo 9:00 Grand Fork 10:50 Border 11:00 – 12:00 Winnipeg 13:00 Porotage la Preirie 15:30 Minnedosa 17:00 Dauphin 18:00	603 miles	Dauphin
三日目	Dauphin 7:00 Yorkton 9:00 Regina 11:00 Moose Jaw 12:00 Assinihoia 14:30 Border 15:00—16:00 Opheim Glasgo 17:00	537 miles	Glasgow
4日目	Glasgow 7:00 Wolf Point 8:00 Culbertson 9:00 Williston 10:00 Newtown 11:30 Emmet 14:00 Washburn 16:00 Bismarck 17:00 McLaughlin 18:30 Mobridge 19:00	550 miles	Mobridge
五日目	Moridge 7:00 Piere 9:30 Murti 10:30		

	Mission	11:30		
	Valentine	13:30		
	Theford	15:00		
	Grand Island	17:30	606 miles	
	Lincoln	19:00		
合計			2648 miles	